

釣りに釣られて

高原英夫

第二十六回 「馬淵川（その四）」くにざかい 国境

その日も馬淵川は滔々と流れていた。そして、その川はほんの数キロの間、青森と岩手の県境でもある。多分西の端は明治天皇が行幸した祭、休憩をとられたという場所あたりで、カゴタテバと呼ばれていて、真下は白い岩で断崖絶壁になつていく。小学校の遠足で一度行ったことがあるだけでその後近づいたことはない。

子供の頃、青岩橋という県境を結ぶ橋から西に見え高くそそり立つその絶壁は、何者をも近づけない青森県の砦のように見えた。

当時、自分達を県境というより、国境の防人であるかのように思っていた。そこに住んでいる子供達のそんな奇妙な意識の話なのだ。いわゆる、同じ日本国内でありながら、領土を争った戦国武将のことは後々覚えたことだが、子供ながらのクニの意識の芽生えだったのかもしれない。

馬淵川はそんな子供達の心を知ってか知らずか、絶対に厳然たる幅を保ち、しか

も柔らかに流れていた。

小学校は四年生の頃にすぐ近くの山の上に新築され引越した。生徒達も、机や椅子を運び何度も何度も上り下りし、引越しを終えた。ところがその場所は、我が青森県の領土を岩手県のワラシ（童子）がたまに横切り往き来するのを見渡せる絶好の場所でもあった。

あえて先走って言うてしまおうが、その岩手県と同じ年頃の子供達に何の恨みも持っていたわけではない。ただ、他国の人間が何の断りもなく通る、だから取り囲んで威圧する、それだけなのだ。殴り合いなどはしない。

稲穂が金色に立ち揃った頃に二、三人の女の子を中心に、数人の男子の上級生が取り囲むようにして田んぼの真ん中の道路を通るのを我が国の同級生は見逃さなかった。放課後だったがすぐに十数人の男子生徒が集まり、一気に山を駆け降り、そのまわりを囲んだ。

しかし、こちらから言うことには何の根拠もなく、言い掛かりの何物でもない。

「何しに来たのよお！」

相手は押し黙って私達の詰問が絶えるのを待っている。いやこつちにしたつて、特に何を責めるといふことでもないのだから、その威圧も長くは続かなかつた。

やがて囲みが解けその子達は逃げるように去つて行つた。気まぐさだけが残つた。

私の家は雑貨店をしていた。その川向ここの集落のおかあさん達がよく買ひ物に來ていたので何人かはその顔を知つていた。實際、通学するにしてもその集落からは私達の小学校へ通う方がきつと近かつたに違ひなかつた。ただその子達の家は岩手県にあるので、わざわざ遠い小学校へ通つていたのだった。

どういふ訳か當時はよく戦争ものの映画がかけられていた。何の娯樂もなかつた時代、小学校の小さな講堂で巡回上映された映画には、立見から何から窒息しそふになるほどの集落の人達が集まり、銀幕だつたか何の幕だつたかにひたすら目を凝らしていた。

もちろん、高田幸吉の股旅ものや、近衛十四郎の剣劇ものは今のバラエティーみたいなもので、二本立てとか三本立ての中には、よく中国とか、ロシアとの戦争ものがかけられた。

あの斬られても斬られても、消毒だとばかりに口にいつぱいの酒を含み、傷にプアーと吹きかけて、また斬り合いに出て行く、そう、あの森の石松などはまさしくヒーローで、夏に浴衣を着せられた時には必ず腰に竹の棒を差し、石松は自分だとばかりにチャンバラごっこでは斬りまくられて、それで満足だった。

そして冬、広い畑が雪に覆われると、ロシア軍と日本軍に分かれて戦争ごっこに明け暮れた。

森の石松も旅順の要塞を攻める兵士も、まるで一緒くただった。

終戦からもう十数年はたつていただろうに、まだ戦前の子供のように振る舞い、あの秘密兵器ができていたなら、まだ日本は負けていなかった、いやそれどころでなく勝っていたなどと本気で信じていた。

そしてある夏休みの日、私達はいつもの川辺で遊んでいた。一番石へ行き、二番
に行き、三番石まで行くと戻る。余裕のある子は、向こう岸の足のつくあたりまで
行き、そして戻る。体が冷えれば土手の岩に寄りかかり暖まる。いつもの風景だっ
た。

すると向こうの土手を「あれんどお（あいつら）」が通るのが見えて、真向かいで
止まった。一気に緊張が走った。

バシャ、ボチヨと音がした。石が投げ込まれたのだった。すぐに応戦と行きたい
のだが、手頃な石がまわりにない。こちらは五、六人、あっちも同じくらいか。少
しばかりの石を集めて投げ返すのだが、ほとんど届かない。やっと向こう岸の近く
に落ちている。こつちの一人はまだ川の中にいて、どうせあつちの石も届かないも
のと決めつけていた。しかし、少しずつ着水点が近づいてきている。敵の方が遠く
まで投げていた。というのも対岸の土手は水際から十メートルは上にあり、そこに
道路があり陣地なのだ。石は川を越えて飛んで来た。隠れる所もない。

いくらもたたないうち、川の中に残つて二番石の陰にいた下級生が声ともならない声で「ウウツ」と言つて私達の方を振り向いた。

坊主頭から血が流れていた。本当に石があたつてしまつたのだつた。

向こう岸でも、こちらのただならぬ様子がわかつたのだらう。投石はすぐに止んだ。川に飛び込み下級生を見ると、左耳の上がすこし切れて血が流れていた。直撃ではなかつた。幸いにもなどといえる話ではないが、もう数センチ中央だつたらと、今でも恐ろしくなる。傷口を手で押え川から上げ、ふと向こう岸を見るともう誰もいなかった。すぐに家へ連れ帰つた。しかし、そのことは何の騒ぎにもならなかつた。

勝つたとか負けたとかの気持ちは少しも湧かなかつた。重く黒い塊が一つ頭の中に沈んだような気が長く続いた。それは、争いの中で生の血を初めて見、そしてとんでもないことになりかけ、加えて川向かいの彼等への敵意はなんだつたのかと答えのない思いからだつた。

その後も何度か彼等を見かけ、また道路でもすれちがった。

あの時からだろうか、取り囲んだり、石を投げ合ったりすることはなくなつた。

互いが川で隔てられ、知らず知らずのうちに胸の中に育ち続けた根拠のない敵意を、すべて捨てたとまでは言えないが、ただ、人を傷つけたり、恐怖を与えたりすることは何の勝利でもなく、本当は自分も傷つき、ただただどうしようもなく厭な気持ちになることを互いに知つたからに違いなかつた。

平成23年12月